日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.18, 067-078 (2017)

多言語学生の言語意識と CS
―関係性理論による語用論的解釈の可能性―

佐藤　美奈子
日本大学大学院総合社会情報研究科

Language Awareness and Code-Switching in Multilingual Students
―A possible explanation based on Relevance Theory―

SATO Minako
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Observation of students at an international high school found that they use more than two different languages according to the places where they speak or the person they speak with. Code-switching is one of the linguistic activities commonly observed among them. Researchers have been trying to determine the factors that may trigger switches. Code-switching is frequently considered an indication of inadequate acquisition of one or two languages. But observing it among students at an international high school, they seem to code switch for various kinds of reasons and purposes. Two main types of code-switching were found among students: in one type, they seem to code switch by mistake and show some regretful expression or comments after that. In the other type, they seem to even enjoy adopting code-switching. This paper first describes these two types of code-switching and then, from the view point of Relevance Theory, proposes a possible explanation, especially for the latter type.

1. はじめに

本稿は,在日外国人受け入れ校に在籍する 5 人の高校生の言語相と使用意識を明らかにした調査に基づき,多言語話者であるインフォーマントの 4 つの言語－社会の言語,学校言語,家庭言語,さらに居住地域の小コミュニティの言語―によっておこなわれるコード・スイッチング (以下,CS) を,関係性理論を理論的枠組みとした語用論の立場から解釈を試みるものである。

2. CS の先行研究と本稿における CS の定義

2.1 CS の先行研究

CS は,CM (コード・ミキシング), 混合,借用といった類似の概念との区別が不明確であり,研究者がそれぞれの立場から定義づけをし,研究をおこなってきた。形式面からは一般的に,付加的 CS,文間 CS,文内 CS の 3 種類に分類され (Poplack, 1980), 機能面からは,①構成,②意味,③相互作用,④文体的効果,⑤言語習得の機能を主軸として,最近では,⑥若者意識共有,⑦ことば遊び,⑧CS 使用合図などに分類され,検討されている (Gumperz, John J. 1982 日本語訳 2004: pp.94-107; Nishimura, pp. 131-158; Fotosa, pp.83-96;宮原, 2011: pp.243-250)。そのほか,CS の方向性―一方進行か双方向性か (陳, 2001)―についての考察もなされつつある。ただし,これまでの CS 研究は,概して「形態素」単位,「文」単位で CS をとらえ,その形態や意味,機能を分類,分析することに比重が置かれてきた傾向がある。

2.2 本稿における CS の定義

本稿の調査では,インフォーマントの学校言語である英語を基盤とする会話に,社会の言語である日本語,各インフォーマントの家庭言語であり,地域コミュニティの言語でもあるブラジルポルトガル語,

中国語,スペイン語,タガログ語,ネパール語が挿入,付加される形で CS が展開する。言語だけでも 7 言語に及ぶうえ,「ジャポンゲス」(注 1) と呼ばれる,ポルトガル語と日本語の混合種も入り混じり,個別言語の文法規則からの分析は不可能と思われた。したがって,本稿では,龍城 (2000) の「伝達的ユニット」の概念を取り入れ,「話し手の視点 (伝達的視点)からの意味的まとまりのある伝達ユニット」(陳, 2002) を CS の構成素単位とし,その構成要素の「『かたまり』と『かたまり』との間の『キレメ』において言いよどみやポーズが起り,これを契機としてしばしば言語が転換される」(陳, 2002) さまを,本稿における CS の定義として,その様相を観察する。

2.3 語用論的解釈と本稿の意義

Trudgill (1983) は,「言語機能の一つ」とは,「互いの関係構築である」(三宅, 2015, p.239) とし,CS に対する,発話行為理論,語用論,談話文法分野からのアプローチに焦点を当てた。CS の分析に,会話のコンテクストを積極的に加味した研究には,陳 (2002) の,初対面の 2 人のバイリンガルをインフォーマントに,親疎関係の深まりと CS の変化の関係性について調査した研究がある。陳 (2002) は,ハリディの機能文法における「機能の構成素単位」(陳, 2002) を CS の構成素単位として分析を行い,会話のコンテクストを考慮に入れることにより,「これまでの研究が達成できなかった時間などのコンテクストと言ったパロールと CS との間の対応関係を捉えることができ」(陳,2002) た,と述べている。初対面同士であった陳 (2002) のインフォーマントとは逆に,本稿のインフォーマントは,互いの言語能力のみならず,生活環境,生い立ち,さらにはそれぞれが自身の言語に対してどのような思いを抱えているかさえも知り尽くした仲間同士である。言語使用には,自身の言語に対するインフォーマントの意識が少なからず反映されており,本稿の CS 調査においてもそのことが明らかになった。したがって,本稿では,会話のコンテクストー場の磁力ーは,もちろんのこと,インフォーマントの背後にある,言語認識,言語意識も考慮して,次の 2 つの方向性から CS の解釈を試みる。ひとつは,発話行為,この場合は CS,をその使用状況から切り離して考えるのではなく,コンテクストに戻し,そのなかで有機的にとらえる,ということである。そして,もうひとつの方向性として,CS は,コンテクストによって一方的に決まるというものではないということ,つまり,「発話者は意図する意味を伝え,目的を達するために意識的に文のスタイルを選択することが」(三宅, 2015: p.238) あり,CS というのは,そのことを「具体的に示した箇所となっている」(三宅, 2015: p.238)ということである。

CS に,会話の行われたコンテクストを加味するとともに,その背後にあるインフォーマントの言語意識をも加味した分析は,従来の CS 研究の傾向から考えると新しいものではないか,と考える。具体的には,CS 調査から得られたパターンに対し,D・スペルベルと D・ウィルソン (D. Wilson & D. Sperber) の関連性理論,特に,「関連性の認知原理 (Cognitive Principle of Relevance)」と「最適関連性の当然視 (Presumption of Optimal Relevance)」を理論的枠組みとした解釈を試みた上で,調査で得たインフォーマントの言語意識,CS 意識を加味し,総合的な解釈を試みたい。

3. CS 調査

3.1 調査の概要

本調査は,本稿のインフォーマントの多言語生活の実態と言語意識を調査したうえで,それを基盤としてインフォーマント同士の実際の言語使用状況を観察する。インフォーマントの,自身の言語に対する意識,言語生活,およびコード・スイッチングに対する意識,など,調査で明らかになった情報をもとに CS に着目する。特に,D・スペルベルと D・ウィルソンの関連性理論を理論的枠組みとした,語用論の立場からの解釈を試みたいと思う (なおインフォーマントの意識調査の内容については,資料 1~3 参照)。

しかるべき場では,しかるべき言語を使用するよう「期待され」,いかなる組み合わせであれ,複数言語の混用を「期待されない」環境下に置かれたインフォーマントが無意識に,もしくは意図的に生じた,自分や他者の CS をどのように受け止め,どのような反応を示しながら会話を展開させていくのか,CS の背景にある話者の言語意識も加味して解釈する。そ

れぞれのインフォーマントが自身の言語に対して抱く意識は,各々異なっているものの,共通していることは,次の 3 点である:

① 日本で暮らし,英語を基盤言語とする学校生活を送りながらも,それぞれが別に家庭語や地域コミュニティの言語をもっている。いずれも,親の都合で日本と本国の間を行き来し,外国人集中居住区で周囲の日本人とのトラブルを目の当たりにする,などの経験を多かれ少なかれもっている。それゆえ,日本社会や日本語に対して必ずしも肯定的な思いばかりを抱いているわけではない。そのことが日本語学習への動機にも影響し,能力的差異を生む要因ともなっている。

② 家庭と学校での使用言語をしっかりとわけることを「期待」される環境下にあり,それぞれのドメインを侵略することも,会話のなかでうっかり「ちゃんぽん」(注 2) してしまうことにも否定的である。さらに,他人のそうした行動に対しても良い感情を抱いていない。

③ 今回の調査の 5 人は,高校入学当初からの同級生であり,互いの使用可能言語,能力,心的態度も熟知している。

3.2 調査の方法

調査 (I～III) (資料 1-3 参照) を,2016 年 5 月から 10 月まで 6 か月間にわたりおこなったあと,その結果を分析,検討したうえで,本調査を,2016 年 10 月下旬,放課後日本語教室でおこなった。方法は,実際にインフォーマントの自由な会話を観察し,その CS に着目した。時間は,約 20 分程度である。録音することはインフォーマントに伝えてある。後日,文字起こしをおこないながら,再度インフォーマントに面接調査をおこなうことで,調査で生じた,自身の CS について,その意図や心情などを確認した。

3.3 トピックの設定

本調査では,ディスカッションという堅苦しさを一切外し,自然に集まった仲間同士の会話の流れのなかで CS を観察することを目指した。よってテーマは,「無題」,基盤言語もあえて指定していなかった。ただし,学校内であることから自ずと基盤言語は,英語か日本語,という前提のもとで開始された。話題は,中間考査 (10 月中旬) 後の解放感溢れるなかであったこともあり,秋の行楽,秋の味覚など気楽な話題に終始した。そのため, CS が出やすい状況に自然となっていった。

3.4 インフォーマント

インフォーマントは,外国人受け入れ指定校である公立高校に通う 3 年生 5 人である。年齢は,17 歳から 18 歳,男子 2 名と女子 3 名である。当校は,外国にルーツをもつ生徒を受け入れる学校であるが,日本人の高校生も通う普通校である。当調査のインフォーマントは,そのなかの「外国人クラス」に 1 年生から在籍している。いずれも学校言語と社会の言語 (英語と日本語) とは別に,第 3,第 4 の言語をもつ多言語話者 (マルチリンガル) である。各インフォーマントの使用言語,言語能力および自身の言語に対する心的態度など,調査で得たインフォーマントの情報を表 1 と資料 4～7 に示す。ここでは,CS 調査の分析に直接かかわる,インフォーマントの使用言語情報 (表 1) のみを示し,他は資料として添付する。

表 1 母語とその他の言語についての言語情報(注 3)

	性別	国籍	第 1 言語	第 2 言語	第 3・第 4 言語
SAM	F	ネパール	英語・ネパール語		日本語
HIT	F	ブラジル	ポルトガル語・日本語		英語
KIM	F	ペルー	スペイン語・日本語		ポルトガル語・英語
INN	M	中国	中国語・日本語		英語
GAB	M	フィリピン	英語・タガログ語		フィリピン語

4. CS 調査結果分析

4.1 言語意識と 2 つのパターン

インフォーマントの会話は,言いよどみや繰り返し,途中で相手をからかったり,メンバーが好き勝手に入れ替わったり,内内で話をはじめたり,など,混乱を

極め,どこで切り替えているのか,はっきりしなかった。そのため後日,面接調査でインフォーマントに一緒に録音を聞いてもらい,CS が起こった場所を指摘するとともに,それぞれ挿入した言語でどのような意味を言っていたのか,そのときの心情,意図などを追認した。その結果,今回の会話調査で確認された CS においても,先行研究で指摘された形式上の 3 つの分類,機能上の 8 つの分類のそれぞれが,かなりの程度起こっていたことが明らかになった。確認された形式,機能については,以下の説明のなかで随時,言及していくが,本稿では,こうした形式や機能上の分類とは別に,新たな分類として 2 つのパターンを提起する。それは,一連の調査で得たインフォーマントの,自身の言語に対する意識および CS に対する意識と,英語と日本語を「期待」されている,という環境が CS にどのように影響し,どのような形となって表れているか,という点に着目することで明らかなったものである。

パターン I は,CS のあとに「Ah」「Oh, sorry…」,あるいは,舌を出してごまかす,苦笑い,もしくは,他人の CS に対して「ほら～」,「Wait, wait…」と制止や注意を促す,といった反応が見られるもので,以後,このような反応を「取り繕い反応」と呼ぶことにする。

パターン II は,パターン I におけるような悪びれた反応は一切見られず,むしろ堂々と,あるいは楽しそうに,CS をおこなっている場合である。

どのような場合にパターン I となり,どのような場合はパターン II となっていくのか。何か一定の法則,共通性があるのか。以下にその詳細な分析を試みたい。

4.2 パターン I 「取り繕い反応」が示される場合

英語基盤の会話,もしくは日本語でのやり取りがしばらく続いていたなかで,インフォーマントがそれぞれの家庭言語または地域言語を挿入し,CS を行った場合に,「Ah」,「Oh」,「Sorry」,といった言葉,反応が見られる。挿入される語は,比較的短く,相手の言葉に相づちを打ったり(①),思わず反応したり(②),といった場合や,自分のなかで独り言をつぶやくように考えているとき(③),同じ言語の者同士で意見を確認したりし,結果的に両者だけが別世界にいるような雰囲気を醸し出すとき(④),などが観察された。

① 相づち

SAM: Ah, KIM, did you see Chris this morning?

KIM: No, but Chris, what?

SAM: He was dancing in the classroom this morning, he's, Chris, he's crazy!

KIM: ***Si, si, tanbién (そう,だね:スペイン語)***, ah, ***no es (違う: スペイン語)*** …yes, so…crazy, but Chris will dance at the school festival, so….

KIM は,スペイン語で返したあと,「ah」と気づいたのだが,また慌てて,それもスペイン語で,「no es (違う)」と言っている。これは,スペイン語で返してしまったことが「違う」ということで,会話としては次の,「yes」が本来の答えである。言い繕おうとしてまた CS してしまったため,会話が混乱している。

② 思わず反応

INN**:** KIM, is it the workbook that we should hand in after the test?

KIM: ***y(何?:スペイン語)***, **ah**…***no es ashi (それは違う:スペイン語)*, oh,** it isn't.

KIM は,INN の言葉に,思わずスペイン語で「y (何)?」と聞き返す。聞き返しの反応でこのような CS を示すことは多くみられる。ただこの場合も,①同様,いったん「ah」と気づいたにもかかわらず,その気づいたこと,つまり「スペイン語で答えるのは違う」という意味で,「no es ashi (それは違う)」と言ってしまったために,また,「oh」と言って慌てて取り繕うことになった。そしてようやく本来の,「これは違う (提出するのはこのワークではない)」という意味での「it isn't」という回答にたどり着いている。

①と②はともに KIM が「本来使うべきでない家庭語: スペイン語」で答えてしまい,取り繕うとして ah, …oh…と繰り返してしどろもどろになってしまった例である。KIM は,今回のインフォーマントのなかで最も「ちゃんぽん言葉」を嫌悪し,特に学校という,家庭語を用いるべきでない場での家庭語の思わ

ぬ挿入に対して,逐一その場で改めようとするためにかえって混乱し,このような「ちゃんぽん」を招く結果となっている。

③　独り言のようにつぶやく

SAM: Why, umbrella? INN, you have an umbrella?

HIT: Yes, fine, it's fine today, so, why, INN, you always hold an umbrella, don't you ?

INN: ***就是 (だから: 中国語)***, **ah**, because it was rainy, ***我就 (それで: 中国語)***, **ah,** so , brought an umbrella.

女性二人に責められるような状況となり,INN は,口ごもるように中国語が出てしまった。

④　内輪話

INN を交えて話していたとき,KIM と HIT が互いに顔を見合わせ,意見を確認するようにポルトガル語に CS している。

KIM: ***Serio…(本当？: ポルトガル語)***

HIT: ***Eu cambém acho (私もそう思う: ポルトガル語).***

INN: …?

HIT: Ah, it means …I think so, too…**sorry.**

HIT と KIM は,ともにポルトガル語を理解できるため,思わず「私たち世界」に入ってしまうことがある。また,「自分たち同士の会話」が周囲に理解されていない場合,話していても話していない,聞かれていても聞かれていない,という気持ちになり,周囲にかまわず話してしまうことがある。

英語と日本語の使用を「原則」とする学校での授業中,「話をやめ！」という教師の注意に対して,外国人学生のなかには家庭語 (スペイン,ポルトガル語)に言語を切り替えることで,「話しているけど話していない」とでもいうような認識になる学生がいる。「原則」から逸脱した言語は,伝達手段としての存在が「無」に帰され,話者を,まるで「話していない」かのように気持ちにさせる。一種の「内緒話」現象である。

同様の現象は,学生の通学途中や外国人居住区の状況に対して寄せられる,周辺住民からの苦情からも推察できる。外国人生徒が公共のバスや列車内,駅の構内で周囲の迷惑を顧みずにポルトガル語やスペイン語で話をし,うるさいという苦情が学校に寄せられる。学生側は「どうせ理解されていない」という理由で声を抑えず話をし,住民側は,意味がわからないがゆえに余計に腹立たしく,「騒音」以外の何ものでもなく思われるのであろう。双方ともそれを意味あるコミュニケーションの「言葉」と認識していない。この現象は,③の「独り言」の例とも重なる部分がある。「聞かれても意味がわからないだろう」という,一種の安心感から,本来,内言となるはずの思考の言葉が音声を伴って発せられるのである。その場の原則から「逸脱」した言語は,コミュニケーションの道具としての機能を失い,「無」に帰すのである。それがその学生の母語であるから,第 1 言語であるから,だから内言として発せられるのではないか,という解釈も可能であろうが,今回のインフォーマントの場合,あえて原則から逸脱した言語を用いることで「話していない」ことにしているのではないかと思われる。

4.3 パターン II 「取り繕い反応」がない CS 場合

今回の調査では,パターン I と同様に CS をおこなっているにも関わらず,取り繕い反応が一切見られず,平気な様子で CS がおこなわれるパターンも明らかになった。ともすると楽しそうな様子で互いに目配せなどして CS がおこなわれる。パターン I は,インフォーマントの家庭語が挿入されて CS が起きていたのに対し,パターン II では,たいてい英語基盤の会話のなかに日本語の単語が挿入されて会話が進行していく場合である。日本語の語句が挿入されたあと,会話は何事もなかったように英語に戻る。具体的には,日本語の未習得の言葉の意味を確認する,学習ストラテジーの例(⑤),本調査のインフォーマントの年齢の日本人生徒同士の会話でも頻繁に用いられる,学生言葉,仲間言葉の例(⑥),さらに,日本語に CS されているが,それに相当する英語表現が存在しないわけではなく,また会話の参加者が未習得というわけでもなく,会話の双方がその英語表現をわかっているうえで,あえて日本語を用いて CS を行って

いる場合(⑦)である。⑦は,後に詳述するように,その言葉が話される文化の風物,情景などと結びついた,「ひも付き語句」による CS である。この例については特に,関係性理論を用いて語用論の立場から解釈を試みる。

⑤－学習ストラテジー

(INN が,前日,同じクラスの CHRIS と部活動のあとに,コンビニでおでんを食べた話を始めた)

INN: CHRIS, he is crazy, he ate ODEN with mayonnaise !

HIT: Ah, ODEN, あ…市駅の？あそこ,はんぺん,超おいしい！

INN: そうそう,クリス,あいつ,卵を…。

(ODEN の話題に頭のなかで日本語のスイッチが入ってしまったのか,会話が一気に日本語に転換してしまった。とたんに今まで話に入っていた GAB が口を閉ざしてしまう。GAB は,2 人の早口の日本語にはついていけず, 見かねた SAM が再 CS を促す)

SAM: English, …please.

HIT : Yes, I know, sorry, お…お…*ODEN*….

GAB: *ODEN*?

SAM: Ah, *ODEN*…it's like pot-au-feu, …with *SHOYU*, soy sauce, you know?
…And *HANPEN*…*HANPEN*, what? What's that made from?
Maybe vegetable…yes, Mina?

Mina: No, it's made from fish.

(Mina: 稿者)

GAB が日本語に苦労し,日本語になると口を閉ざしてしまうことをメンバーは,十分承知している。今回の会話のなかでも日本語に CS し,そのまま会話が展開しそうになると,すかさず誰かが GAB に配慮し,「English, please」と,注意して再 CS を促す場面が何度か見られた。また,後半部分「*SHOYU*, soy sauce」の例にもあるように,GAB の日本語習得を助けるために,日本語とその訳を続けることもインフォーマントの会話でしばしば観察される現象である。*SHOYU*, soy sauce の CS は,Gumperz (1982) 他,が指摘する CS の 8 つの機能のなかの⑤学習ストラテジーである。

⑥－「仲間言葉」

(INN が,GAB の前に手を差し出し,尋ねる)

INN: GAB, where is my *CHARI KEY*?

GAB: Oh, sorry, here.

HIT: Why do you have INN's *CHARI KEY*?

INN: GAB used my *CHARI* this morning after *ASATORE*.

CHARI とは,「チャリ」,すなわち「自転車」の若者言葉である。そして *CHARI KEY* とは,「チャリの鍵」,すなわち「自転車の鍵」であるそして, *ASATORE* は,「朝トレ」,すなわちクラブ活動の「朝の授業前の部活動の練習でのトレーニング」である。

このように若者言葉や学生が日常的に用いている言葉は,英語の会話のなかでもそのまま日本語で用いられる。特に本校の場合,日本人生徒も多いことから,ごく普通の高校生言葉を外国人学生も自然に習得している。インフォーマントも含め,外国人学生は,これらの言葉を好んで用いる傾向がある。特徴は,若者言葉の特徴と同様,「*ASATORE* (朝の練習でのトレーニング)」,「*KEITAI* (携帯電話)」と短縮されることである。前出の *CHARI KEY* は,日本人生徒も「チャリの鍵」ではなく「チャリキー」で用いる。また,東海地方では自転車を「ケッタ」と呼ぶことがあり,「*KETTA KEY*」,「*KETTA OKI* (ケッタ置き場＝自転車置き場)」のバージョンがある。いずれも外国人生徒の会話で何の違和感もなく,もちろん「ちゃんぽん」言葉に伴う罪悪感もなく用いられている。これは,Gumperz (1982) 他,が指摘する⑥若者意識共有の機能の例である。

また,「ちゃんぽん」は,書き言葉にも見られる。日本人,外国人を問わず,学生は,メールを受け取った印として「り」とのみ打ち,「了解」という意味で返信することがよくある,という。クラスの連絡網で日本人学生から来たメールに外国人学生が「り」と返信するだけでなく,外国人学生同士の間でも用いられ,ポルトガル語やスペイン語での一連のやり取りのあとに「Ri」または「ri」とのみ打つことがある,という。本国の友人との間では用いることはないが,日本在住の外国人学生同士の間では普通にみられ

る書き言葉の CS の例である。これも,若者意識共有の機能と言ってよい。

宮原 (2011) は,大学生インフォーマントの会話における CS を調査し,「インフォーマントの発話の中には日本語に CS した集団語が多数みられる」(宮原, 2011: p.247）ことを指摘する。「仲間ことばや若者ことばを使うことで,日本の若者であること,同じ大学で学ぶ学生であるという意識を共有している」(宮原, 2011: p.248）のであろう。本稿のインフォーマントも,日本人学生と共通の若者ことばを用いることで,日本で暮らす若者としての「文化的コードの同一性」(滝浦, 2000: p.26) を確認している。

⑦ー「ひも付き言葉」

(ネパール出身の SAM が,秋になり,雨季が終わって,山のきれいな時期になる,という話をしている)

SAM: GAB, the **rainy season** has also finished in Philippines…, yes ?

GAB: Ah, yes, but I don't care… ah, **rainy season** Philippines, but I hate ***TSUYU*** in Japan.

SAM: Oh, ***TSUYU***! I know, I hate it, ***TSUYU***.

この会話で GAB は,SAM の rainy season (雨季)という言葉に対し,フィリピンについては rainy season と答えておきながら,日本について言及するときには,あえて日本語で *TSUYU* と CS している。また,SAM 自身,先に rainy season と言っていながら,ここでは,*TSUYU* と CS している。これらの CS は,何を意味しているのであろうか。

改めて確認しておくが,GAB は日本語を非常に不得手としており,今回のインフォーマントだけでなく,クラス全員が特に GAB を気遣い,日本語を控える傾向がある。とりわけ SAM は,そうした気遣いを示す学生である (上記の⑤参照)。にもかかわらず,その二人が *TSUYU TSUYU* と連呼するのには明らかに何らかの意図があると考えてよいであろう。この一連の会話における 2 度の CS を,語用論の関連性理論から解釈することはできる。

4.4 関連性理論からの解釈

関連性理論は,D・スペルベルと D・ウィルソンが,グライス理論の「推論モデル」を批判的に継承し,1980 年代に提唱した,語用論モデルである。

大津は,関連性理論を次のように説明する:「関連性理論は,発話解釈にあたって,聞き手の頭の中でどのような認知活動が行われているかについて説明を試みる本質的に認知的な理論」である (大津編, 2009: p.109)。D・スペルベルと D・ウィルソンによると,「人間は生まれながらにして,自分の認知環境が改善されることを望んでいる存在」であるという。「認知環境」とは,「人間が頭に浮かべることのできる想定の総和」を指し,「認知環境を改善する」とは,「入力情報が頭の中の想定と相互作用した結果,認知効果をもたらすこと」,そしてこの「認知効果をもつ情報」は「関連性がある情報」と呼ばれる (大津編, 2009: p.109)。

認知効果を得るには,情報を処理する労力が必要となる。「関連性」とは,結局,「認知効果と処理労力とのバランスの問題であり,認知効果が高まれば高まるほど関連性の程度は増加し,解釈のための処理労力が増加するほど関連性は低くなる」。これを定式化したものが,「関連性の認知原理」である。

「関連性の認知原理」
「人間の認知は,関連性を最大にするように働くようデザインされている」
(Sperber & Wilson, 1995: p.260)

CS をしたとしても関連性が最大になるわけではないが,ここで Yamamoto (2013) は, Sperber & Wilson (1986: p.140) を引用し,CS の効果を次のように説明する:

(CS) may help determine "a range of possible contexts", from which a particular context that will maximize relevance is to be selected (Yamamoto, 2013: p.89).

この解釈を用いると,先の GAB と SAM がなぜ,CS をし,*TSUYU TSUYU* と日本語で繰り返しているのか,その効果は何かが理解できる。2 人は,東南アジア,南アジア出身であり,雨季 (rainy season) について

はよく知っている。しかし,2 人のイメージする母国の rainy season とは,雨量が多い時期ではあるが,バケツをひっくり返したようなスコールが 2~3 時間降ったあとは,カラリと澄んだ空が広がり,暑さも消えて地元の人たちからはさほど嫌なイメージを持たれていない季節である。一方,日本の雨季 (TSUYU) は,異なる。一日中,じとじとと小雨が降り続き,アジア出身の 2 人にとってさえ極めて不快な季節である。だからこそ 2 人は,日本の雨季を表現するのに rainy season とそのまま繰り返すのではなく,「関連性を最大にする」コンテクストが選択されるよう日本語に CS し,*TSUYU* と述べることで,「a range of possible context」を限定した。つまり,「最適な関連性」に的中させたのである。

発話が「最適な関連性」をもつとは, D・スペルベルと D・ウィルソンの「最適関連性の当然視」の定義によれば,次の a, b を満たすときである:

「最適関連性の当然視」

a. その発話 (＝顕示的刺激) は,すくなくとも聞き手がそれを処理する労力に見合う程度の関連性を有する。

b. その発話 (=顕示的刺激) は,話し手の能力と選択の範囲内で最大の関連性を有する。

(Sperber & Wilson, 1995: p.270)

つまり,発話が可能性として最適の可能性をもっていても,話し手がそこにそれがある,と期待し,その解釈のための努力を払うよう仕向けなければ発話として成立しない,ということである。つまり,そこには「最適の関連性がある」と,聞き手に思わせるもの,関心を引き付けるものが必要である,ということである。

Sperber & Wilson (1986) は,話し手には,二つの意図－情報的意図 (the informative intentions) と伝達的意図 (communicative intentions)－がある,と主張する。前者は,聞き手に対し,一連の想定を明らかにすることであり,後者は,話し手の,その情報的意図を互いに明らかにすることである (Sperber & Wilson,1986: p.163)。Yamamoto (2013) が指摘するように,CS というのは,もし CS をしていなかったら伝えられなかった想定 (assumptions) を話し手に伝えるともに,その強烈なインパクトから,話し手を引き付ける強力な力をもっている。「話し手の情報的意図も同時に伝える」(拙訳) (Yamamoto, 2013: p.90) ことを可能にするものである。つまり,「バイリンガル話者は,CS することにより,最小限の処理で最適な想定が引き出される可能性があるコンテクストの範囲へと聞き手を向ける」(拙訳) (Yamamoto, 2013: p.90)。したがって,CS は,確かに「余計な手間 (extra processing cost)」がかかるものであるが,その一方で,「最も経済的な手段 (most economical means)」でもあるといえる (Yamamoto, 2013: p.90)。

先ほどの SAM と GAB の *TSUYU* の会話に戻ろう。二人にとって英語は表 1 に見るように,日本語よりも得手な言語であり,しかもこれは,英語基盤の会話のなかでの一コマである。にも拘わらず,「余計な手間」を払ってまで CS を行ったのには,「じめじめとして,一日中雨が降り続き,湿度も高く,実に不快な,日本の季節」と説明しなくても,*TSUYU* と一言述べるだけで,ダイレクトに「最適の関連性」へと引き付けることができるからである。以上が,語用論の関連性理論の枠組みからの CS 解釈の試みである。

5. まとめ

今回の調査では,インフォーマントの言語リソースおよび言語意識に関する調査 (第 I 調査) から言語使用・ドメインの調査 (第 II 調査),および CS に関する意識調査 (第 III 調査) をおこなったうえで,CS に焦点を当てた会話分析調査をおこなった。それにより,多言語話者である高校生インフォーマントが,生活言語と学習言語をわけるという「期待」のもと,比較的言語の不均衡なく,自身の言語リソースを発達させていることが明らかになった一方で,インフォーマントのなかに,強力な,言語的「TPO」意識なるものが浸透していることも,CS に焦点をおいた会話分析から浮き彫りになった。言語「TPO」とは,「場面・時・話題」によって使用を「期待」される言語とそうでない言語があるという自覚,と言ってよい。「期待」に対する最たる逸脱として,「ちゃんぽん」言語 (CS) があり,それに対する否定的意識が

生じるために,CS をおこなうたびに, ah…, oh, sorry…と,「うっかり」を自覚する言葉が出てしまうのは,この言語「TPO」意識の表れである。その一方で,あえてその逸脱を犯すことで,あるいは犯してでも「ちゃんぽん」をおこなうことで生じる効果をインフォーマントは自覚しており,その効果を意図して CS を利用していることも,今回の CS 調査から明らかになった。*CHARI KEY* や *ASAREN* などの仲間意識の CS や,*TSUYU* など,背景文化のひも付きの CS である。これらの例,特に後者は,本稿で試みたように,関連性理論の枠組みから語用論的現象として解釈することができる。そう解釈することで,高校生インフォーマントが,自身の多言語能力を能動的に「利用」していることの現れとして CS をとらえることも可能となる。Trudgill (1983) が述べるように,「互いの関係構築」は,言語機能のひとつである。モノリンガルが対話者との親疎関係,上下関係といった,距離感を測りつつ,一つの言語内で表現を調節するように,多言語話者は,複数の言語にわたり,言語的「TPO」に照らし合わせながら「最適の関連性」を模索している。「余計な手間」がかかる CS も,語用論的見地からは,「最も経済的な手段」と成り得るのである。

注

1. ポルトガル語と日本語が混じった言葉は,本調査の調査地域では特に問題となっており,「ジャポンゲス」と呼ばれている。地区の子どもたちの間では,「合言葉」のように用いられる。

2. 注 1 の「ジャポンゲス」のように,言語を「混合」すること,つまり 2 言語を混ぜて用いることを,インフォーマントはじめ,本校の学生は「ちゃんぽん(する)」という。「混合」の在り方は,さまざまで,形態レベルで,いわゆる「混種語」となることもあれば,音韻レベルで混合されることもある。たとえば,ブラジルポルトガル語の日本語との混合の場合,日本語で「ありがとう」と言っていても,発音が Obrigado (オブリガードゥ) というように上り調子になることがある。

3. 第 1 言語と第 2 言語が一緒になっているのは,いずれのインフォーマントも両言語に優劣の差がなく,どちらを第 1,第 2 とも決め難い,という回答であったからである。また,GAB は,日本語に対する苦手意識が強く,たとえ第 4 言語としても,自身の言語として入れることに抵抗を示したことから表 1 に記載していない。

引用文献

英文

Fotos, Sandra S. (2001). “Codeswitching by Japan’s Unrecognized Bilinguals: Japanese University Students’Use of Their Native Language as a Learning Strategy” in Studies in Japanese Bilingualism, Clevedon: Multilingual Matters Ltd., 2001.

Gumperz, John J. (1982). Discourse Strategies, Cambridge University Press, 1982.の日本語訳,ジョン・ガンパーズ　『認知と相互行為の社会言語学　ディスコース・ストラテジー』井上逸平他訳 松柏社 2004 年 pp.94-134

Nishimura, M (1997) Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics, NY: Peter Lang Publishing.

Poplack, S (1980) Sometimes I’ll start a sentence in Spanish Y TERMINO EN ESPAÑOL: toward a typology of code-switching1 Linguistics. Volume 18, Issue 7-8, pp.581–618

Sperber, D. & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell.／(1995) Second Edition

Skutnabb-Kangas, T (1981) Bilingualism or Not: The Education of Minorities Multilingual Matters LTD.

Trudgill, P. (1983). Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society (2nd Edition). Penguin Books.

U.ワインライヒ (1976) LANGUAGE IN CONTACT Mounton & CO.(『言語間の接触―その事態－』神島武彦訳 岩波書店)

Yamamoto, M (2013) Code-switching accounted for by Relevance Theory Kwansei Gakuin University Repository 総合政策研究 44 pp.85-91

日本文

今井邦彦 (2005) 『語用論への招待』大修館書店

大津由紀雄編 (2009) 『はじめて学ぶ言語学―ことばの世界をさぐる 17 章』ミネルヴァ書房
滝浦真人 (2000)「ことば遊び論―見えないコミュニケーションは何を伝えるか」『言語』2 月号 pp.20-27
陳麗君 (2001)「台湾人の会話における一方進行のコードスイッチングの構造-『感声的な語』・『語』によるコードスイッチング」現代社会文化研究 NO.22 2001 年 11 月 pp.237-254
陳麗君 (2002)「コンテクストからみたコードスイッチングの構造-台湾人バイリンガリズムの場合-」『南台応用日語学報 第 2 号』pp.4-98
陳麗君 (2011)「言語接触による言語変化と文法化現象の一例　台湾中国語"有"構文の分析を中心に一」山形大学大学院社会文化システム研究科紀要第 8 号 (2011) pp.103-116
藤村香予 (2013)「二言語話者の談話における「コードスイッチング」・「コードミキシング」の必要性――英国に住む日本人の場合――」『安田女子大学紀要 41』 2013 pp.23-32
本林響子 (2006)「カミンズ理論の基本概念とその後の展開 Cummins (2000) Language, Power and Pedagogy を中心に」『言語文化と日本語教育』言語文化と日本語教育 31 号 2006-06-24 pp.23-29
三宅正隆 (2015)「Peter Trudgill, Sociolinguistics　An Introduction (to Language and Society）を社会言語学スル」『立命館国際研究　27-4, March 2015』
宮原温子 (2010)「日本語英語バイリンガル大学生の言語使用状況」目白大学　人文学研究第 6 号 2010 年 pp.181-196
宮原温子 (2011)「日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング―機能的分析を中心に―」目白大学 人文学研究 第 7 号 2011 年 pp.239-254
龍城正明 (2000)「テーマ・レーマの解釈とスープラテーマ」小泉保編『言語研究における機能主義』くろしお出版 pp.49-74

資料

1. 調査 I

Skutnabb-Kangas,T (1981) が提唱する母語基準にしたがい,インフォーマントに,自身の複数の言語について,さまざまな角度,基準－習得順序,使用頻度 (広域性と専門性),主観的能力評価,客観的能力結果(英語検定,日本語能力試験),自動性 (automacy),心的態度 (attitude),威信性 (prestige),など―から意識化を促したうえで,総合的に「母語」を認定してもらった ([表 1]参照)。

2. 調査 II

インフォーマントがカミンズ理論の「BICS/CALP」(“basic interpersonal communicative skills”/”cognitive /academic language proficiency”) の概念と「相互依存仮説」に基づき家庭と学校で言語を切り替え,学習言語と生活言語を明確に区分するよう「期待」されている状況,およびそれに対するインフォーマント自身の意識を明らかにするためにドメイン調査を行った。

3. 調査 III

調査 II のドメイン別言語切り替えではなく,一連の会話のなかで言語を切り替える CS に焦点をあて,CS の方向性と,自身の CS および他人の CS に対するインフォーマントの意識を明かにした。

4. 調査 I 結果　インフォーマント基本情報項目と言語認識

英: 英語, 日: 日本語, 中: 中国語, ス: スペイン語,
ペ: ペルー語, タ: タガログ語, ポ: ポルトガル語

	SAM	**HIT**	**KIM**	**INN**	**GAB**
入学枠	外国人枠	外国人枠	普通枠	外国人枠	外国人枠
性別 年齢	F,18	F,17	F,16	M,17	M,17
出身国・ 来日年齢	ネパール 13 歳	ブラジル 13 歳	ペルー, 5 歳 往復	中国, 13 歳	フィリピン, 13 歳
(1) 第 1 習得	ネ	ポ	ス	中	タ
(2) 言語能力 **① 自己申告(ABC)**　A: 自信あり, B: 普通, C: 自信なし					
英語					
話・聞	A	B	B	B	A

読・書	A	A	A	A	B
総合	A	B	B	B	B
日本語					
話・聞	A	A	A	A	C
読・書	B	A	A	A	C
総合	A	A	A	A	C
その他言語					
	ネ	ポ	ス	中 (北方)	タ
話・聞	A	A	A	A	A
読・書	B	A	B	A	A
総合	A	A	B	A	A
			ポ	ポ	
話・聞			B	B	
読・書			C	C	
総合			C	C	
② 客観的言語能力基準					
日能試験	1 級 高 2 秋	1 級 高 2 秋	未 受 験	1 級 高 2 夏	3 級 高 2 秋
英語検定	準 1 級 高 2 秋	準 1 級 高 1 秋	準 1 級 高 2 秋	準 1 級 高 2 秋	2 級 高 2 春
(3) 言語の価値＊					
広さ	英	ポ	日	日・中	英
深さ	英・日	英・日	日	日	英
威信性	英	英	日・英	英	英
(4)「自動性」					
独り言	英	ポ	ス	中	タ
計算	英	ポ	日	中	英
(5)感情的絆	ネ	ポ	ス	中	タ
(6)総体的母語認識	**ネ・英・日**	**ポ**	**ス**	**中**	**タ**

＊広さ: 総体的頻度使用域, 深さ: 専門・学習言語

＊威信性(＝「格式」prestige): U.ワインライヒ(1976）は,「社会的立身出世における言語の価値」とする。U.ワインライヒ(1976) 自身,その注 (p.160）で述べているように,これには,交信伝達の方法としての言語の利用価値 (usefulness),文字―文化的価値 (literary-cultural worth) なども含めた雑多な内容をもたせて用いられることもあるが,ここでは,「言語の社会的栄達に利する点」という U.ワインライヒ (1976) の考えに限定して用いる。

5. 調査 II 結果 ドメインによる言語切り替え ―国際高の子どもの場合―

ドメイン・サブドメイン			SAM	HIT	KIM	INN	GAB
学校	場面	授業	英・日	英・日	英・日	英・日	英
		放課	英	英・ポ	英・日・ス	英・日・中	英
	対話者	教師混合教室	英・日	英・日	英・日	英・日	英
		同胞友	なし	ポ	ス	中	英
家庭	対話者	父親	継父：日 実父：ネ	なし	ス	中	継父：日・会話無
		母親	ネ	ポ	ス	中	(英・タ) 別居
		兄弟姉妹 (年齢)	妹 (4): 日・ネ	兄 (20)：ポ	妹 (6): ス・ポ	なし	父連子: 日・会話無
		日本親戚	日	なし	なし	なし	会話無
		本国親戚	英・ネ	ポ	ス	中	タ
		両親(夫婦間)	日	なし	ス	中	日
社会	初対面の人 (日本で)		日	日	日	日	会話無
	居住地区,同胞の知人		ネ	ポ	ポ・ス	中	会話無
その他機能	メール	学校友人	英	ポ	ス	日	英
		本国友人	英	ポ	ス	中	英

目的別	トピック	時事問題	日	日	日	日	英
		私的内容	英	ポ	ス	英	タ
		内緒話	英語	ポ	ス	日	タ

6. インフォーマントが通常おこないがちな CS の方向性と CS 対する意識

CS の方向性: 各インフォーマントが普段起こしがちな CS の方向性を矢印 (←)で示す。

[基盤言語←CS する言語]

CS が,基盤言語に対し,文中,文と文の切れ目に挿入され,また基盤言語に戻ることを示す。

[基盤言語⇒CS する言語]

一度 CS すると,CS の言語で話が続いていくことを示す。

	SAM	HIT	KIM	INN	GAB
CS の型―組合わせ	英←日 日←英	英←日 英←ポ 日←ポ	日←ス ス←日	中←日	日←タ 日⇒英
自身の CS に対する意識	悪い	悪い, ついうっかり	悪い, ついうっかり	仕方ない	仕方ない
他人の CS に対する意識	悪い, 仕方ない	悪い	悪い,	悪い	仕方ない

7. CS をおこなう理由,自覚している効果・作用

SAM	日本語でみんなで使っている言葉は,そのまま英語でも使ったほうがいいと思うし,いちいち英語に翻訳できない。ニュアンスが違ってくる。
HIT	相手がポルトガル語を話せるのなら学校でもポルトガル語で話してしまうし,そこで英語や日本語を用いるのもおかしい気がする。でも授業中は,ポルトガル語,使わないでしょう？(本人は自覚がないが,HIT の授業中のポルトガル使用率は,かなりにおよぶ)。 ポルトガル語で話をしていて,日本のことは日本語で言っちゃうけど,そのアクセントがポルトガル語のアクセントになる気がする。
	例: 日本語の単語が上り調子になり,たとえば,「ありがとう」が「Obrigado(ᶻ)」の発音で,「ありがと(ᶻ)」となる,ということらしい。
KIM	家で「ちゃんぽん」で使うのはいけないといわれている。ちゃんとしたことばが覚えられないから。 学校では,なるべく日本語にしている。きちんと覚えたいから。
INN	学校で習ったことの中国語を知らないから,家で話すときに日本語で言って,その中国語を教えてもらったりするときに,中国語に日本語が入るけど,それは仕方ないと思う。おじさんたち (＊父親の職場の仲間) とは,中国語だけど,僕は,北のほうの言葉を使う。 ＊INN は,中国北部「七台河県」という地域出身である。面接調査では,「きれいな中国語として有名なんだ」という INN の言葉が聞かれ,中国語,という一括りにしたくない INN の気持ちが窺えた。
GAB	「にほんご,わからない。」 日本語についてのコメントは,この一点張りで,日本語で話し始めても,途中でやめてしまうが,実際,周りの日本語はある程度理解できている様子が窺える。

(Received:May 31,2017)
(Issued in internet Edition:July 1,2017)